民間フットサル施設における個人参加型フットサルの現状と課題
Current situations and issues of futsal program for personal user in commercial futsal facilities

1K07B054-1 金澤 遠広

指導教員 主査 作野 誠一 先生 副査 松岡 宏高 先生

【緒言】

「いつでも、どこでも、だれとでも」という特徴を持つフットサルは、近年、わが国において全国的な広がりを見せている。しかし、『施設数増→プレイヤー人口横ばいないしは減少』という状況からフットサル施設経営における事業成立のハードルは以前より確実に高まっている(月刊レジャー産業,2008)といわれるように各フットサル施設は更なるプレイヤーの確保を図る必要がある。そこで本研究では「個人参加型フットサル」と呼ばれるフットサル施設で行われているサービスに注目した。これは施設側がチームではなく個人の利用者を募り、集まった人々をチーム分けし、ゲームを楽しむというものである。個人で気軽に参加でき、プロモーション次第で競技人口はもちろんフットサル業界の発展に繋がる可能性を大いに秘めていると言える。

また、個人参加型フットサルは、フットサルをするだけでなく、利用者同士、利用者とのコミュニケーションを図る場ともなる可能性が高く、フットサル施設を中心としたコミュニティを形成する役割も考えられ、今後ますます需要が高まると思われる。しかし、先行研究も見当たらず、このサービスも実施状況やプログラム内容が様々である。それ故、本研究では東京都における民間フットサル施設の個人参加型フットサルに焦点を当て、以下の3点について明らかにすることを目的とした。

- ① 東京都の民間フットサル施設における個人参加型フットサルの実施状況を明らかにする。
- ② 個別事例を取り上げ、個人参加型フットサルの果たす役割やサービス内容について詳しく検討する。
- ③ 以上のことを踏まえ、民間フットサル施設における個人参加型フットサルの現状と課題を考察する。

【研究方法】

まず、東京都にある民間フットサル施設の個人参加型フットサルのプログラムの実施状況を整理し分析する。次に個人参加型フットサルを実施している民間フットサル施設3社・フットサル関係者1名に対してインタビュー形式で調査を行い、個人参加型フットサルを実施することのメリットや課題、今後の展望についてどのように考えているかを調べ、今後の個人参加型フットサルのあり方を考察する。

【結果と考察】

実施状況に関しては、今回調査対象とした東京都の民間フットサル施設(n=61)において、個人参加型フットサルは8割以上

の施設が実施していることが分かった。所在地ごとの実施施設数については23区内、23区外に大きな違いは見られなかったが、土日の実施頻度に関しては23区外の方がより多く展開している傾向があることが分かった。また、施設の所有するピッチ数と個人参加型フットサル実施状況の関係は、ピッチ数が少ない施設ほど個人参加型フットサルを実施していない割合が高い傾向にあることが分かった。ただし、ピッチ数が多いからといって1週間に実施する個人参加型フットサルのプログラム総回数が増えるわけではなく、各施設が利用状況に合わせて展開していることが推測された。

実施のメリットに関しては、フットサル人口の拡大や利用者との交流のほか、レンタルコートの稼働率が低い時間帯に個人参加枠を設けることで、コート稼働率を上げ、利益を得ることが挙げられた。一方、課題は「参加者の志向性の違い」であることが分かった。施設側はプログラム毎にレベル分けをし、参加者の制限をしているが、レベル設定はプレイヤーの主観による自己申告になってしまうため、完全には賄いきれていないようだ。

また、今後は利用者を集めるだけでなく、施設を訪れる利用者にフットサルをするだけではないプラスアルファを施設側がどのように提供していくかが重要な課題になることが分かった。それ故、個人参加型フットサルを発展させるためには、「個人参加というフットサルの楽しみ方があるということを知らないプレイヤーに伝えること」、「色々な切り口で色々なレベルの人を受け入れられるプログラムを用意すること」という入口部分の強化や「参加者1人1人に合った対応」、「参加者に仲間意識を持たせ、チーム単位での活動やサークルでの活動を勧める」といったコミュニティビジネスまで発展させること」といった中身まで強化することが求められる。

【まとめ】

個人参加型プログラムのニーズは今後一層高まってくると推測されるが、対応はまだ充分とはいえない。個人参加型フットサルを成功に導くには、プログラムの参加者やスタッフが作り出す施設の雰囲気と個人参加型フットサルの仕組みづくりの両面が大切である。ただ個人参加型フットサルの時間を設けるのではなく、施設側が参加者へ歩み寄り、コミュニティの場として個人参加型フットサルを活用していくことが重要になると考えられる。